

第四章

修己治人のくふう——しつけと志の教育

立志の教育（一）

人生において「これを成し遂げよう」とか「このような人間になろう」と人生の目的に志をはっきりと定め、日々努力を重ねていくことは、何よりも大切に違いない。しかしながら、その志が曖昧模糊あいまいもごとして
いる場合が多いのではなからうか。若くして志が定まり、その後も一貫した生き方ができれば理想だが、
そうでなくとも、できるだけ早く人生の的を射抜きたいものである。本書の結びに、改めて先人の立志論
に学びたい。



溪斎英泉『教訓』心学図会（天保14年刊）「一生の計は幼年」「一月の計は朔日」「一年の計は元日」「一日の計は鶏鳴」「一家の計は和順」の五計と「元日は大晦日のはじめかな」の発句。



貝原益軒『大和俗訓』（宝永6年刊）左頁は竹田定直（春庵）の序文冒頭。定直は益軒に師事し、学問全般を学び、のちに益軒の推薦で福岡藩儒となった。

志は人生の舵

学生にしろ、社会人にしろ、「あなたはなぜ学んでいるのか」「なぜ働いているのか」と問われて、おのれの志を即答できたなら、堅固な立志の人と呼ぶにふさわしいであろう。いうまでもなく、「上の学校へ進学するため」とか「生活のため」といった手段の回答では、明確な志とはいえない。なぜなら、志には、人生の目的や自己の存在理由に根ざした確固たる動機が欠かせないからである。

しかし実際には、茫漠と学び、漠然と働く人が多いのではないだろうか。いや、かくいう私も二七歳の春、往來物と出会うまではたいした志ももっていなかったから、偉そうなことはいえない。

江戸時代の文献をひもとくと、立志に関する記述はいくらでもみつかるが、たとえば、貝原益軒は『大和俗訓』四卷「心術（下）」でこう述べている（原本四卷第三丁表）。

世は海なり。身は船なり。志はかぢなり。かぢをあしくとれば、行べきかたにゆかず、風波にあへば、舟くつがへるが如し。志のもちやうかんよう也。あしく志をもてば、身をくつがへす。かぢのとりやうあしくして、舟をくつがえすがごとし。

いわば、志は人生の羅針盤であり、志をもたぬ人は、人生という航海にさまよう漂流船のごときものかもしれない。まさしく、益軒の語るとおりであろう。

さて、明治・大正期の教育者村上専精は、『立志論』（大正一二年版）の序文でこう述べている。

人の人たる所以のものは、志を立つるにあり。人にして若し志を立つることなかりせば、禽獸魚鳥

の類と何等の区別あるべからず。人にして志を立つるの必要なこと、之を植物に譬ふるに根の必要なるが如しと謂ふべし。…今吾等人類として世に生存し、事をなさんとするもの、先づ以て志を立つべし。志を立つるは実に成業の初めなり。古来人多しと雖も、未だ志を立てずして成業せしものある

を聞かず。…凡そ動物は志を立てるといふことなし、其の働くや唯現実的なり、然るに人は必ず志を立て、其の志のために働くところあつて、始めて人たるの資格を有すと謂ふべし。

すなわち、立志は人間を人間たらしめる要件であり、動物はもっぱら「現実的」な存在だと指摘する。そういえば、以前、あるシンポジウムで、チンパンジーの知性の研究で知られる京都大学教授松沢哲郎氏の講演を拝聴し、「チンパンジーはそこにあるものだけしか見ないが、人間はそこにはないものを見る（想像すること）ができる。人間とチンパンジーとは、認識できる時間と空間の広がりには大きな差がある。人間は、未来を想像する力があるがゆえに、絶望もし、希望をもつこともできる。チンパンジーには希望も絶望もない」と教わった。



寛政五年（一七九三）の正月、数え一四歳（満年齢で一二歳と数日）のときに詠じた漢詩「述懐」を教わった（寺田清一編、森信三講述『中・高生のための「人間の生き方」一〇頁』）。

目の前の現実しか見えないのなら、たしかに禽獣魚鳥との違いはない。その最たる特長を、村上専精は「立志あるがゆえに人間なり」と表現し、立志に欠かせない自覚を「大胆小心」の四字に集約した。「大胆」とは「自分を重んずる心」「自分を信ずる心」であり、「小心」とは「恭敬（慎み敬う）・謹慎（行いを慎む）」である。前者は、自分がいかなる偉人・豪傑とも変わらない、同じ尊い人間であると信じ、おのれの天命に任せて何事も恐れない信念を持つこと、後者は、何事も慎んで大切に思い、細心の注意を払うことである。そして彼は、両者の関係を「大胆は眼の如く、小心は足の如し」とたとえた（前掲書九頁）。

…足の歩行は眼あつて之を見るに依る。眼あつて之を見るにあらざれば足ありと雖ども、進むことは出来ぬ。即ち眼は足の歩行を指導する力あると共に、又足は眼の指導を受けて之を實踐するものである。大胆と小心との関係も亦実に斯んなものである。例へば此に千万円の金を貯蓄せんとする者あれば、即ち一種の大胆家である。彼れは此の大望あるがため、平素厘毛の出納に注意するに相違ない。是れ即ち小心である。彼れに此小心あれば先きの大望を成就するであらう。若し此の小心なかりせば、先きの大望は成就せず、全く空想を以て了るに相違ない。大胆と小心と相離るべからざること概してこんなものである。

森信三、一三歳の衝撃

明治・大正・昭和・平成を生き抜いた偉大な教育者森信三（一八九六―一九九二）一三歳の正月の逸話である。信三少年は、父とともに祖父の家へ新年の挨拶に行き、祖父に歳を尋ねられた。「一三歳になりました」と答えると、祖父から「一三歳という歳は、人間の一生でいちばん大事な時だが知っているか」

と言われ、頼山陽が寛政五年（一七九三）の正月、数え一四歳（満年齢で一二歳と数日）のときに詠じた漢詩「述懐」を教わった（寺田清一編、森信三講述『中・高生のための「人間の生き方」一〇頁』）。

十有三春秋（じゅうゆうさんしゅんじゅう）

逝者已如水（ゆくものはすでにみずのごとし）

天地無始終（てんちしじゅうなく）

人生有生死（じんせいせいしあり）

安得類古人（いづくんぞこじんにるいして）

千載列青史（せんざいせいしにれつするをえんや）

ああ、いつの間にか、もう一三になってしまった。ウカウカしてはられない。時は流水のように流れ去ってゆく。この大宇宙には始めもなく終わりもないが、人間の一生はじつに短いものである。ところがその短い人間の一生において、どうしたら、むかしの偉い人たちと肩をならべて歴史にその名の残るような人間になれるであろうか。

現代なら小学校卒業前後の年ごろである。そんな少年時代に頼山陽

はかくも大きな志を抱いていた。信三少年はこの詩を聞かされ、「五体を大地にたたきつけられたような」衝撃を覚え、初めて「人生」に本気で向き合ったという。自ら「人生」というものについて初めて心の底ふかく、タネまきがなされたように思います。そしてそれが、今日に到るまで、わたくしの人生の歩みの上に大きな影響を与え、かつその根本動力となっているように思われてならないのであります」と回想した（前掲書一二頁）。

『修身教授録』に学ぶ立志

昭和六年に大阪天王寺師範学校（現、大阪教育大学）の専任教諭となった森信三は、昭和一一・一三年の二年間、修身科の講義を学生に口述筆記させた。その講義録が『修身教授録』である（昭和一五年に全五巻で刊行。その抄録が平成元年、致知出版社より復刊）。当時の国定教科書は徳目的に偏っており、その内容に満足できなかった森信三が、修身教科書をまったく使わずに口授したもので、当時としては異例中の異例、森信三も「退職覚悟」の肚を決めて実施した、いわば魂の講義だった。この『修身教授録』（第二部）から立志に関する記述を抜粋してみよう。

【第二講「立志」】

○真に志を立てるということは、この二度とない人生をいかに生きるかという、生涯の根本方針を洞察する見識、並びにそれを実現する上に生ずる一切の困難に打ち克つ大決心を打ち立てる覚悟がなくてはならぬのです。

○真の志とは、自分の心の奥底に潜在しつつ、常にその念頭に現れて、自己を導き、自己を激励するものでなければならぬのです。

○人がその一言を慎み、一つの行をもおろそかにしないということは、その根本において、その人が、この人生に対して志すところが高く、かつ深いところから発するのだといえましょう。

○そもそも世の中のことというものは、真実に心に願うことは、もしそれが単なる私心に基づくものでない以上、必ずやいつかは、何らかの形で成就せられるものであります。

○この肉体の生きている間に、不滅な精神を確立した人だけが、この肉のからだの朽ち去った後にも、その精神はなお永遠に生きて、多くの人々の心に火を点ずることができるでしょう。

【第七講「大志を抱け」】

○人間は、その志を立てて初めてその人の真価が現れるのです。志を立てない人間というものは、いかに才能のある人でも、結局は醉生夢死の徒にすぎないのです。

○野心とか大望というは、畢竟するに自己中心のものであります。すなわち自分の名を高め、自己の位置を獲得することがその根本動機となっているわけです。ところが、真の志とは、この二度とない人生をどのように生きたら、真にこの世に生まれてきた甲斐があるかということを考えて、心中でつねに忘れぬということでしょう。ですから結局最後は、「世のため人のために」という所がなくては真の意味で志とはいいたいのです。

要するに、森信三のいう真の志は、①生涯の決心や覚悟をとまなうもの、②つねに意識し実践しつづけるもの、③特定の個人・地域・時代を超越し得るもの、の三点が要諦である。したがって、手柄を立て立

身出世を望む「青雲の志」は真の「大志」とはいえず、むしろ「野心」にちかい。最初の問いに戻ろう。あなたは「なぜ学ぶのか」、そして「なぜ働くのか」。それに対する即答が、いまの自分自身なのである。「人は一言にてその志を知らる」——これを改めて肝に銘じたい。

立志の教育（二）

前項につづき、佐藤一斎の『言志四録』を中心に江戸時代の立志論を一瞥する。学問における立志の重要性、立志の方法や立志の効用など、立志を考える視点になるだろう。そして、いろいろな出会いや機縁をつうじてその志を大きく育て、不屈の精神で『群書類従』などの大事業を成し遂げた百折不撓の人、塙保己一の生涯をたどりつつ、「盲にして言ならぬ」保己一の生き方に学びたい。



塙保己一旧宅（埼玉県本庄市児玉町保木野。国指定史跡）。入母屋造りの茅葺き二階建ての生家が現代に伝わる（今も子孫が居住）。

江戸の立志論——『言志四録』を中心に

これまでも何度か引用してきた佐藤一斎の語録集『言志四録』にも、「立志」についての記述は多い。本書を柱に、適宜、他の文献も援用して、江戸の立志論を概観してみたい（▼印の部分は久須本文雄全訳注『座右版言志四録』を参照した）。

①志を立ててから学べ

▼学問を始める際には、必ず大人物になろうとする確乎たる志を立ててから、書物を読むべきである。そうせずに、ただ徒らに、見聞を広めることだけを欲するならば、あるいは、おごって人をあなどる心を増長させ、あるいは自分の非行を偽るようなことにならないかと心配するのである。これこそ「敵に武器を貸し与え、盗賊に食料を給する」ようなもので、まことに恐るべきことだ。〔『言志叢録』一四条〕

学問に立志が大切なことは、貝原益軒も、『大和俗訓』一卷「為学（上）」（原本一卷第二三丁表）で、

学問は先志を立てるを以て本とす。志とは、心のゆく所也。道を知り行なひて、君子に至らんと思ふ心つねにをこたりなく、念々やまざるを、志を立てると云。志たゞざれば、学ぶ事成就せず。故に、古人も「志ある者は、其事つゝに成」といひ、又「志たつは、学の半也」といへり。…よるづの事、先本をつとむべし。志を立てるは学問の本なり。志を立てるには勇猛なるべし。柔弱にして、をこたるべからず。をこたれば、しるしなくしてはかゆかず。道を求めるにせちなる志は、たとへば飢て食を求め、渴きて湯水を求めるが如くなるべし。

と述べているとおりで、立志は学問の成就に不可欠の要件とされた。学問における志とは、道を学び実践して「君子に近づきたい」と常に思いつづけて努めることだという。そして、志を立てるためには、勇気を強く奮い立たせなくてはならないとするが、この教えはすべてのことに当てはまる。

②志ある者は、すべてが学びとなる

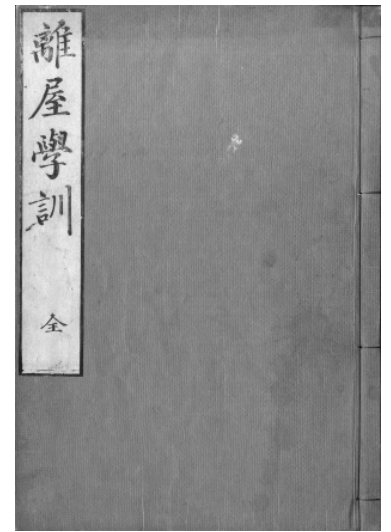
▼しつかりと志——目的——を確立し、これをどこまでも追求するときには、たとえ薪や水を運んだりする日常生活なことでも、学ぶべきものが存在する。まして読書したり、ものごとの道理を推し窮める場合は、なおさらのことである。しかし、志が確立されていなければ、一日中読書をしていても、それは無駄なことにはすぎない。それゆえに、学問をするには、まず第一に志を確立するより大切なことはない。

〔『言志録』三二一条〕

立志が大切なのは、志の有無によって得るものが大きく異なるからである。『大学』（伝七章）に「心ここに在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず、食らえどもその味を知らず」とあるのも、この謂いである。

また、国学者鈴木木艮の学問論『離屋学訓』も、「諸芸ノ五具」、すなわち、学問・諸芸の五要件（師・友・書籍・精力・志）のうち、「志」がもっとも重要であると説いている（原本第一九丁表）。

道・芸ノ二ツヲ学ブニ、肝要・入用ノ具、スベテ五アリ。師ト、友ト、書籍ト、身ノ精力ト、志ト、是也。コノ五ツノ具ノ中ニ特ニ貴キモノハ志ナリ。志アルモノハ事ツヒニ成ルト云語アリ。志ナキ者



鈴木胤『離屋學訓』（文政11年序・刊）
表紙 国学から儒学までの体系的な学問論
で、「学問ノ主意」「四教四科ノ名義」「徳
行ノ学大意」など10章に分けて説く。

ブ事ヲ好ム者ノ得ガタキ也。人、志ダニ深ク篤ケレバ、アナガチニ明師・良友ヲノミ師友トハセズ。
常ニ交ル世中人、常ニ見聞スル世中人ノ物事、皆我師友ナリ。

鈴木胤は、道（学問）・芸（技芸）の二つを学ぶ場合に肝要かつ必要な手段として、「師」「友」「書籍」、そしておのれの「精力」と「志」の五つがあるが、このなかでとくに重要なのが「志」だという。そして、「志ある者は、ついに成る」という言葉のように、「志なき者が事を成した例はない。志さえあれば精力もおのずと強くなり、師・友・書籍もおのずから好むところに集まるものだ」と述べている。志が深ければ、世の中の人も事物もすべて我が師友となる。よって、鈴木胤は、「学問を好む心が深く厚く、その志の高く大きいことほど望ましいことはない」とした。

ノ事ノ成リシタメシナシ。志ダニアレバ精力
モ其方ニハオノヅカラ強クナリ、師・友・書
籍モノツカラ好ム所ニハ集ルモノナリ。志
ナキ者ハ、師ニ遭ヘドモ問ハズ。徒ラニ市人
ニ向フガ如ク、師モ亦「奈々何々」（奈何奈何
か）トイハザル者ヲバ、我イカントモセン方
ナシ」ト見限ルベシ。サレバ、人ヲ諫ル者ハ
世ニ乏シカラズ、諫ヲ受ル人ノナキガ如ク、
教フル者ノ無ニハアラズシテ、タゞ志深ク学

③ 志が邪念・妄念を一掃する

▼ 聖賢の道を学ぼうと志す人は、鋭利な刀と同じで、多くの邪なるものがしりごみして退く。これに反して、志の無い人は、なまくら刀と同じで、子供でさえも侮ってばかりにする。〔言志録三三条〕

▼ 暇にまかせてつまらないことを考えたり、また環境に対してくだらぬことを感じたりするのは、まだしっかりと志が確立していないからである。一つの志が確立しておれば、多くの邪念妄想がことごとく退散して服従するようになる。これを譬えてみると、清らかな泉が湧き出ると、その傍らの水はそれに混入することができないようなものである。〔言志後録一八条〕

たしかに、志が深ければ深いほど、余計なことを考えなくなるだろう。しかし、この境地にいたる前の段階では、貝原益軒が『大和俗訓』一卷「為学（上）」（原本一卷第一三丁裏）で諭すように、学問以外の「外物」や「外欲」に心を奪われず、つねに志すところに集中する努力が必要であろう。

只此道（学問の道）に心を一すぢにすべし。外物に心をうば、るべからず。「物を翫べば、志をうしなふ（珍奇なものに溺れて、大切な志を失う）」と『尚書』にもいへり。云意は、耳目口体（じもくこうたい）にこのむ所の外欲に耽り、外物をこのみ、或、無益の雑芸を一向にすきこのみて、心をかたぶくるの類は、皆是、物をもてあそぶ也。かくのごとく外物に心をうつせば、道を学びて君子となる志をうしなふ。万の外物の翫び・このみ、皆、志をそこなふもの也。程子の曰、専一ならざれば、直に遂る事あたはず。云意は、一すぢになさゞれば、行ひとぐる事成がたし。



慈音尼(兼葭)『兼葭反古集』(宝暦6年刊)2巻冒頭(左は改題本の安永3年刊『道得問答』)。梅岩の講話の聞書などを中心にまとめた心学書。作者は梅岩の高弟で、江戸にはじめて石門心学を広めた女流心学者。

④ 堅固な志は内省から生まれる

これは『言志四録』の記述ではないが、通俗平易な心学書を数多く著した心学者脇坂義堂は、『心学教諭録』三篇上巻「僧我身に立帰り、仏を得し譬喩」(『石門心学書集成』九卷四八九頁)で、おのれを深く見つめ、おのれを知る大切さをつぎのように論ず。

すべて人間世の肝要は、偏に我身に立かへり、我身を知ることなり。我身を知るほど世にあきらかなる知恵はあらじ。我に立かへり我をよく知る時は心うごかず、志しよく道に定るなり。この志し定る時は、心みだりにはせずして常に身心静なり。此心静なる時は、何事も処する所おのづから安し(何事にも落ち着いて対処できる)。

他方、女流心学者の慈音尼(兼葭)は『兼葭反古集』(のちに『道得問答』と改題)二巻の「夫熟おもふに、人は善にほこらず、物とあらそはざる人こそ、あらまほしけれの段」(『石門心学書集成』二巻六四頁)で、道を極めるには自我を忘れることだと語る。

誠に道に志深き人は、みづから明に我非を知るゆへに、志常にみたずして、終にものにほこる事なし。武士の道は我なくてももの、ふになり、和歌の道は我なくて和歌に成とかや。万の道、我なくならでは、その道の達人とはいはれまじ。

道に志が深い人は、「自分の非を明らかに知るため、つねに志が満たされることがなく、最後まで誇ることはない」とし、武士の道であれ、和歌の道であれ、自我を去ってその道を極めるのであり、いかなる道も、自我を滅するまでは、その道の達人とはいえない、という。この主張は、道元禪師が『正法眼蔵』で述べた「仏道をならふといふは自己をならふ也。自己をならふといふは自己をわする、なり」を想起させ、脇坂義堂の「我が身を知る」の先を行く境地である。

いずれにせよ、脚下照顧や内省の繰り返しによって志はより堅固なものとなる。志を突き詰めることは「己を知ること」、さらには「己を忘れること」であり、自我を去った志こそ「大志」と呼ぶべきかもしれない。

⑤ 大志は引き継がれる

人間はとても百歳まで長生きすることはできない。しかし、志だけは永久に朽ちないようにならなければいけない。志が永久に朽ちなければ、その人のなした事業も永久に朽ちないものとなる。その事業が永久に朽ちないものなら、その人の名も永久に朽ちることがない。その名が永久に朽ちなければ、代々の子孫も永久に朽ちることがない。

『言志書録』二二八条



塙保己一先生座像 雉岡城内にあった旧塙保己一記念館にて撮影。同記念館は、2015年に「アスピアこだま」内へ移転し、リニューアルオープンした。

佐藤一斎は八八歳と長寿だったが、『言志四録』のなかでも晩年の『言志叢録』に立志の記述が目立つ。おのれの人生を振り返って、ますます立志の大切さを実感したのである。

大志ならずとも、子供が父母の志を見習うことは、『女芸文三才図会』所収の「教訓百ヶ条」第二条（『江戸時代庶民文庫』一卷四六一頁）に「おさなき時は、言葉をもつて教さとす而已にては聞うる事なし。をしへずとも父母・めのと（乳母）の心ざしを自然と見習ふ物なれば、父母行義よく正しければ、子は教ずして正しく成ぬべき事」とあり、『五倫訓』附録の「礼学童蒙必用」（『近世育児書集成』一七卷一七四頁）に「子は父母の心ざしと、常の正き身の行ひを、幼き時より手本として成人する故、他の教へを受ずして、自然と賢き善人に育もの也」と述べるのとおりだ。人生は有限でも、志は有限とは限らない。

百折不撓の人、塙保己一

『群書類従』の編纂で知られる盲目の大学者塙保己一（一七四六―一八二二）は、数え五歳ごろの病いで視力が弱り、母の懸命な看護や通院も空しく七歳で失明した。その母と二歳で死に別れ、悲しみに明け暮れた彼は、いつしか独り立ちの道を歩みはじめた。江戸では『太平記』四〇巻を暗唱して出世した盲人がいることを知り、記憶力抜群の保己一は「自分にもできるはずだ」と確信する。再三の懇願で父の許しを得た彼は、一五歳で江戸に出て、雨富検校（雨富須賀一。検校は盲人の最高位）の弟子となる。保己一の志が招いた縁であろう、雨富との出会いは彼の運命を大きく変えることとなる。

弟子入り後の保己一は、盲人が習うべき琵琶・琴・三絃（三味線）や鍼術・按摩などの修行をさせられたが、なかなか上達しなかった。たとえば三絃は、習ったことを一晩で忘れ、三年経っても一曲も身に付かないありさまだった。鍼術では、医学書の理解は人並み以上に早かったが、技術の習得はまるで駄目で

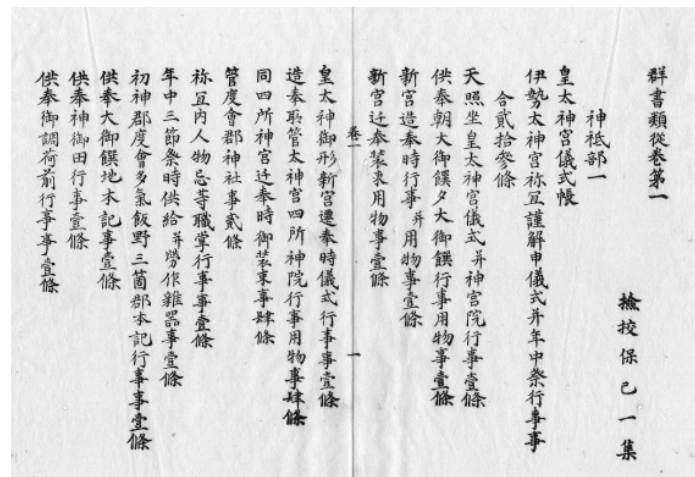
あった。彼が生まれつき不器用だったことにも起因したが、むしろ、彼の関心がもつばら学問に向けられていたことが大きかった。その葛藤のなかで悩み絶望した保己一は、自殺を試みたこともあった。

雨富検校は、盲人としての修行に身が入らぬ保己一のようなすを見かねてこう叱責した（『群書類従』別巻「温故堂塙先生伝」五頁、続群書類従完成会）。

凡、人の郷里をさりて他邦に赴くことは、なす事あらんとての意なり。汝、父母の家をいで、こゝに来るもしかなるべし。されども産業（生業）となすべきこと、一つも習ひ得るものなし。且、朝夕

汝がなすところ、露ばかりも我心にかなはず。さはあれど、門人の禄となる術ををしふるは師の職分なり。汝が好まざることをなせといふにあらず。賊と博とを除きてほかは、何にまれ、心にかなひたらんものをつとむべし。これよりして三とせが間、汝を養ふべし。三年へてなすことなくば、速に郷里に送りやるべし：

「そもそも、人が郷里を去って他国に行くのは、『何かを成したい』という一念があるからだ。お前が父母の家を出て、ここ（江戸）にやってきたのもそうである。だが、盲人の生業としてなすべきことが何ひとつ習得できていない。そればかりか、朝夕、お前がしていることは、少しも



埴保己一『群書類従』(寛政5年~文政2年刊)1巻「神祇部」冒頭 第1丁の袋綴を展開。横10行・縦20字・2段の版式は400字詰め原稿用紙の起源とされる。

ば、勾当昇進の前年、雨富検校は昇進準備金として金一〇〇両を保己一に授けている)。その数年後の安永八年(一七七九)の元旦、三四歳になった保己一は、それまでの自分がおのれひとり志に終始していたことに気づく(『群書類従』別巻「温故堂埴先生伝」九頁を口語訳)。

私の心になうものがない。しかし、弟子に食い扶持を得る方法を教えるのは、師匠の役割だ。お前が嫌いなことをしるとは言わぬ。窃盗や博奕以外なら、どんなことでも心になうことを努めよ。これ以後三年間はお前を養ってやるが、三年過ぎて成すことがなければ、速やかに郷里に送り返す……」この一見きびしくも愛情に満ちた師匠の引導は、保己一を奮い立たせた。

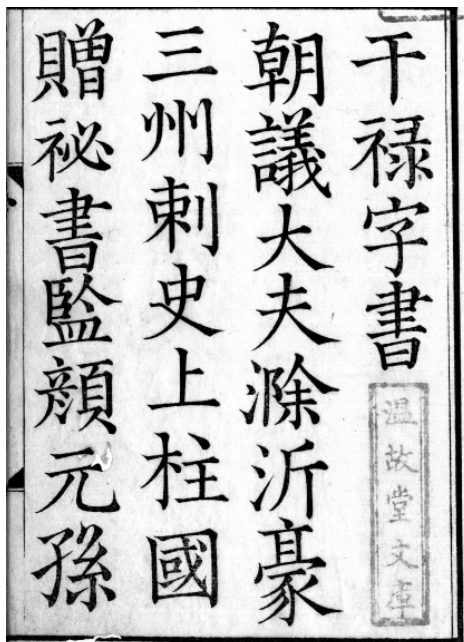
以後、彼は、師匠の絶大な指導や支援により各方面の学問を必死で学ぶいっぽう、毎日一〇〇回の『般若心経』読誦をつづけ(ちなみに、これ以後、死ぬ直前までに読誦した回数は二二〇万回余という。毎日一〇〇回で六〇年以上)、一八歳で衆分、三〇歳で勾当と、その地位を高めていった。これらの昇進には莫大な費用を要したが、それを支えたのが雨富検校をはじめとする周囲の支援者であった(たとえ

先生はつくづく考えた。「私は少しの財産も持たずに勾当の職に就くことができた。これは、まさに天満宮のおはからいであり、般若心経読誦による感化の功德であろう。さらに、二千日の願を立てて努めれば、検校の職に上がることも困難ではないだろう。しかし、それはおのれ一身のはかりごとではないか。ああ、世のため、のちのためにもなることを成そう。異朝には『漢魏叢書』をはじめとする叢書があると聞く。しかし、日本にはまだそのような叢書はない。だから、ここかしこで教えを受けて、あちこちに散り乱れている一卷、二巻の書を取り集めて、版木に彫っておけば、国学を学ぶ人の良き助けになるだろう」と悟り、安永八年の元日より天満宮に誓願して、心経百万巻の願を立て、「その半ば読誦するまでには一千部の書物を集め、百万巻の読誦を終えるまでにはぜひ出版に漕ぎ着けたい」と言って、以後、毎朝、塩断ちし、毎朝午前三時ごろに起きて般若心経一〇〇巻の看経を怠らなかつた。

このように、彼は三四歳の正月に、大きな志、すなわち、のちに『群書類従』と呼ばれる膨大な文献の編纂にすべてを捧げることを神仏に誓った。以後、この一大事業に心血を注ぎ、四一年後の文政二年(二八一九)、七四歳のときに『群書類従』五三〇巻六六五冊(所収文献一二七〇種)を完成させた。

保己一は、休む間もなく『統群書類従』の編纂に着手したが、それも束の間、文政四年に七六歳でこの世を去る。その後、『統群書類従』の編纂は子孫らに引き継がれ、幾多の困難を乗り越え、保己一没後九〇年を経た明治四四年(一九一一)に、ついに『統群書類従』一〇〇〇巻一一八五冊(所収文献二一〇三種)が完成したのである。

五八歳で惣録検校(関東方面の盲人や盲人組織を統括する地位)まで上り詰めた保己一の元には大勢の



埴忠宝（ただとみ）旧蔵「干禄字書（かんろくじしょ）」冒頭 保己一の四男で、保己一が創立した和学講談所を引き継いだ埴忠宝の書き入れがある。「干禄字書」は唐代に作られた漢字辞典で、写真は文化14年に昌平坂学問所で刊行されたもの。

ぬことはない。私も、幼いときに故郷を出たときは、江戸に来てからは徐々に世に用いられるようになって、いまではこのように高禄を賜り、屋敷さえいただいで、なんら貧しいことはない。お前たちは、まだまだ若い。よくよく志を固めるがよい」と言っ

保己一の故郷に建つ本庄市の埴保己一記念館には、宝暦一〇年（一七六〇）八月、数え一五歳で江戸での修行をはじめると、郷里を旅立った際に、母が銭三文を入れて持たせた手製の巾着が、いまも伝わる。同館の展示説明には、「保己一が江戸に出るにあたり、母が縫って持たせてくれたもの。母きよの帯地で作ったものといわれ、保己一は生涯大切に持っていた」とある。

この巾着は、保己一の立志の原点であった。そして、その心を門人に伝え、堅固な立志を促すために、あえて二四文の贄（進物）を課したのであろう。

不撓不屈の精神で志を貫いた埴保己一。彼の人生に尊崇の念を禁じ得ず、本書の結びに保己一の立志伝の一端を紹介したしだいである。



埴保己一の墓 東京都新宿区、愛染院。右奥の五輪塔は雨富檢校の墓。保己一の墓はもと四谷の安楽寺にあったが、明治30年に廃寺となったため愛染院に移された。

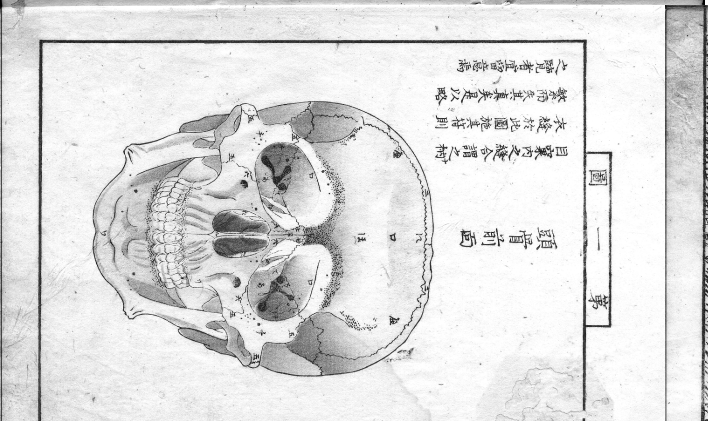
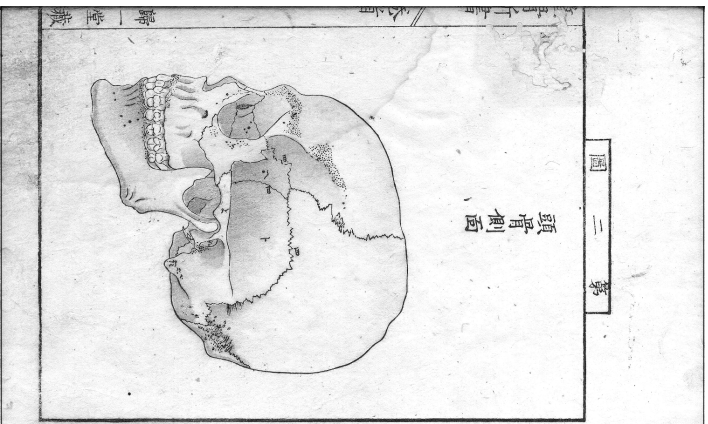
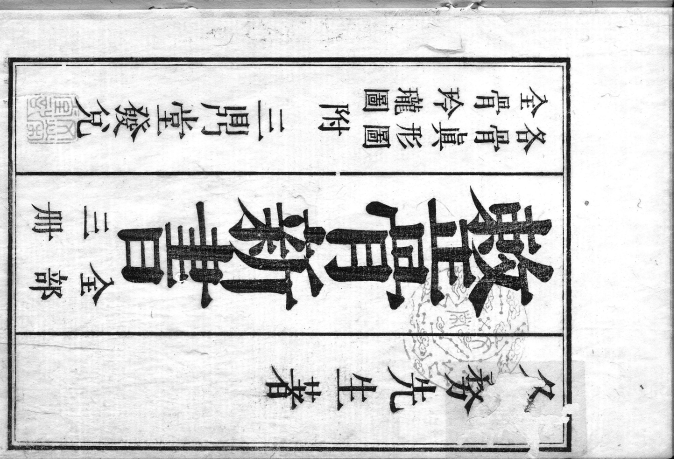
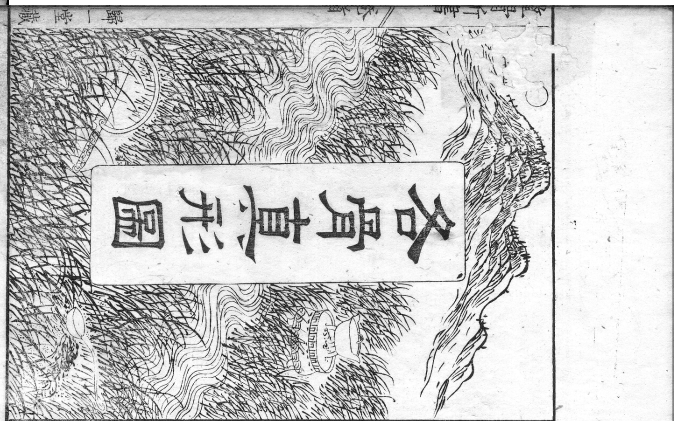
盲人が訪れたが、そのたびに彼は「まず、よく志を固めよ」と説いた（渡辺刀水「埴檢校の話」、温故学会編『埴保己一研究』五〇頁）。これは有職故実家本間百里の『耳敏川』第三冊「埴檢校」に出てくる逸話だが、稀観書のため、安政三年（一八五六）書『み、と川』（筑波大学本、第三冊第四三丁裏）によって全文の口語訳を掲げておく。

埴保己一は、現在、盲人の惣録檢校であり、どんな芸であれ、盲人で世に出ようとする人は、必ず、彼の家を訪れる。その際、名簿に銭二四文を添えて進物とする。いつも、彼が出てきて語るとは、「お前たち、盲人ながら世間に認められたいと思うなら、まず、十分に志を固めよ。志さえ固ければ、どんな芸も興義にいたら

■各務文献『整骨新書』

整骨新書・各骨真形図

【判型】大本3冊(3巻・附録1巻4冊のうち「整骨新書」中巻欠)。縦257枚。
 【作者】各務文献(子徴・帰一堂)作・序。
 【年代等】文化6年夏、中川其徳跋。文化7年5月自序。文化7年6月著者凡例。文化7年12月刊。著者蔵版。【大阪】河内屋嘉七ほか売出。
 【備考】分類「医学」。日本で出版された接骨医学の専門書としては、江戸時代ではなく今までを通じて最高の文献。「整骨新書」の構成は巻首に「各骨真形図」として解剖図を持ってきた。これは全部で33あり全部で14種類の骨があり、24



の形状が書かれている。つまり「整骨新書」の始めには解剖図が載る。続いて上巻に凡例と総論があり、主に骨の数(發乱の時は230、新書では207)や名前など、中巻では各論が出てくる。例えば腫瘍、器官、軟骨、筋/バンド、性別、折法、復法、筋肉、靭帯損傷。下巻は副子(副木や添え木)、包帯、薬剤について3巻にわたって書かれている。この当時としては全書としてほぼ完成されたもの。しかも偏りがなく分野を平均して書かれている。このように日本で最高の接骨医学書という評価を未だに受けている(HP「川崎を散歩する」参照)。

